

第3章 多気志楼物の流行②

「多気志楼物」の一つである「東西蝦夷山川地理取調図」は、武四郎が自身の足で測量し、明らかにした、蝦夷地内部の地形や名所、地名などを詳細に記した地図ですが、数ある北方図の中でも、武四郎が残したこの地図が果たした役割は大きいと言えます。

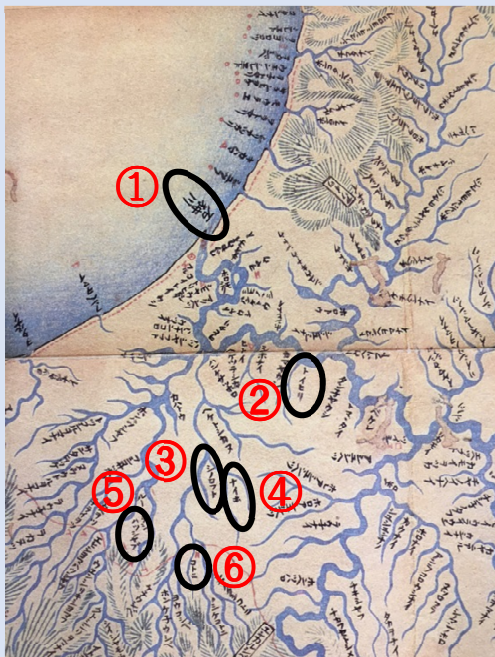
1800年以降、伊能忠敬や間宮林蔵らが蝦夷地の輪郭や地形を正確に紙上に示しましたが、内陸部については調査が進んでおらず、詳図は未完のままでした。武四郎は、アイヌ民族の協力を得ながら蝦夷地を詳細に調査し、また多くの聞き取りを行うことにより、世界最初の正確な蝦夷国詳図を完成させ、出版するに至りました。「東西蝦夷山川地理取調図」と同形式の地図として、「北蝦夷山川地理取調図」がありますが、こちらは幕府の許可が下りなかったためか、刊行されず終了しています。これら2つの地図は、後に、全国初の実測日本図である「大日本沿海輿地全図」の小図をもとに、大学南校(現東京大学の前身の一つ)より出版された「官板実測日本地図」の「蝦夷諸島図」「北蝦夷図」の内陸部にそれぞれ採用されることとなります。

武四郎の地図がどのように採用されたのか？ ～札幌周辺の地図で比較～

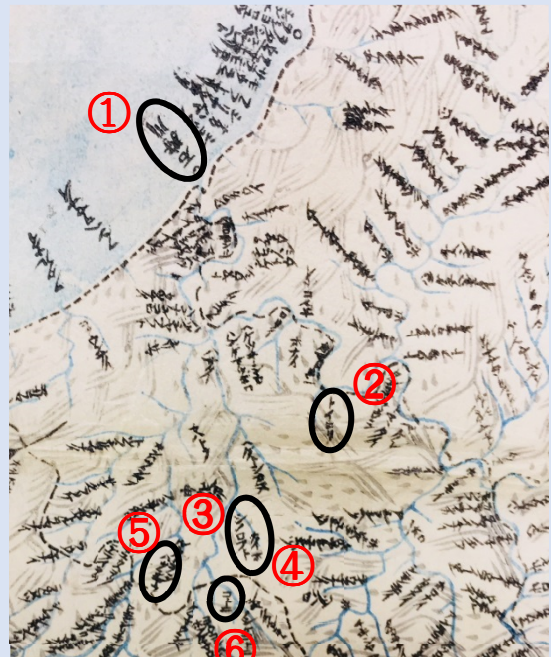
「東西蝦夷山川地理取調図」は、日本に渡来して間もなかった「ケバ描法」(※)により、山地部分が表現されています。「官板実測日本地図」ではケバ描法は用いられていませんが、山脈、水系、地名などは、武四郎の地図が採用されていることが分かります。

※ケバ描法…土地の起伏を表現する手法で、現在は等高線が主流となっている。傾斜の緩急をケバという短い線で示し、急傾斜は太く短い線を密に、緩やかな傾斜は細長い線をまばらに描く。

「東西蝦夷山川地理取調図」安政6(1859)年刊



「官板実測日本地図 蝦夷諸島」明治3(1870)年刊(推定)



◆登場する地名

①石狩川 ②トイヒリ(豊平川) ③シノロフト(篠路川の川口) ④ナイホ(苗穂) ⑤ハッシャブ(発寒) ⑥コトニ(琴似川本)